

異文化間コミュニケーション －日本人学生の中国語誤用の文化的背景について－

寇 振 鋒

1. はじめに

異文化間のコミュニケーションには様々な障壁が存在する。その中でも、異なる文化的背景がその主要因として挙げられる。相手国の文化的背景を理解しないと、誤解されたり、意図する内容が伝わらなかったりという事態が往々にして起こる。

大抵の場合、文法のルールに従えば、大きな間違いは避けることができる。しかし、異なる文化的背景によって生じた誤用については、その要因をなかなかつかむことができない。この点に関して、外国語教育に従事する者はみな、同感であると思われる。

外国人の中国語学習者が作った文章には、文法的には全く問題はないが、中国語らしくない表現がよく見られる。中国人と同じく漢字文化圏に属する日本人でさえも中国語学習において、正しく習得することは困難である。異文化間コミュニケーションに影響する主要因はやはり言語の文化的背景にあると言える。異なる文化的背景によって生じた誤用に関しては、ほとんど教科書にも載っていないし、辞書でも引くことができない。これは、中国語学習者にとって大きな落とし穴となるであろう。

日本人学生の中国語誤用に関する分析は多く存在するが、しかし言語の文化的背景によって生じた中国語誤用に関する考察はあまり多いとは言えない⁽¹⁾。筆者は、日本の社会人および大学生向けの中国語教育において、異なる文化的背景によって生じた典型的な誤用例に留意し、収集に努めてきた。本稿中の誤用例は、社会人や大学生向けの授業中、および期末試験における学生の回答をもとにしている。本稿ではいくつかの誤用例を分類したうえで、主に異文化の視点から、日本人学生の誤用の背景に存在する文化的要因、およびそのコミュニケーションの正確さを検討することを目的とする。

2. 呼称文化における誤用

呼称はコミュニケーションの過程において呼びかける際に頻繁に使用される。そして、国による文化的背景の違いも十分反映されている。日本人学生の中国語学習において、自国呼称文化の影響によって以下のような誤用が生じたことをよく耳にする。これに関してその誤用の要因を検討していくことにする。

2. 1. 人称代名詞の省略における不自然さ

日本人学生の中国語学習者は、人称代名詞の省略によって呼称上の不自然さをもたらすことがよくある。

- ① 上星期儿子感冒了，所以没来。

〔先週は息子が風邪をひいたので、来ませんでした。〕

- ② 妈妈不是中国人。

〔お母さんは中国人ではありません。〕

①は、ある社会人の中国語学習者が欠席した理由を説明する際に言った言葉である。一見して、この人称代名詞の省略は文法的には全く問題はないが、中国人にとっては、とても違和感を感じるのである。

日中辞書中の「息子」はたしかに“儿子”である⁽²⁾。しかし、この“儿子”は一体誰を指すのか、中国人にとっては理解しにくいのである。日本語の「息子」は謙遜語であるため、「私の」のような限定語がいらない。しかし、中国語の場合はこの“儿子”が中性的な呼称であるため、“我儿子”、“你儿子”、“他儿子”のように明確にしなければならない。もし限定しなければ、第三者がその場にいる場合、その“儿子”は話し手と聞き手の間に生まれた者であると誤解されかねない。そのため、“上星期我儿子感冒了，所以没来。”のほう違和感なく中国語母語話者に受け入れられるのである。

①と同様、②の“妈妈”は、一体誰を指すのか、聞き手の中国人に違和感を抱かせる。というのは、話し手と聞き手の間の“妈妈”だと思われる可能性が高いのである。“我妈妈不是中国人”のほうが自然である。仮に、自分の子供に対して、お母さんが、自身のことを教える場合は、“妈妈不是中国人”が自然となる。それ以外は、違和感を感じさせてしまうのである。

以上のように、家族などの呼称に関して、「私の」、「あなたの」、「Aの」、「Bの」のような限定語が省略されると、中国人にとって、分かりにくくなる。

上述の誤用は、日本の呼称文化の負の転移によって起こったのである。つまり、日本語には尊敬語と謙遜語が多いため、「私の」、「彼の」、「あなたの」のような限定する連体修飾語が省略されるのは自然である。そして、日本では、呼称用語が中国語ほど複雑ではない。例えば、祖父母は、息子や嫁に対しても、自分たちのことを「おじいさん」、「おばあさん」で通す⁽³⁾。さらに、母親は、子持ちの娘をもママと呼ぶ⁽⁴⁾。逆に、このような日本式の呼称は、中国人の私たちにとって、あまりにも不思議なのである。

中国語には人称代名詞の尊敬語と謙遜語がそれほど多くはない。“令尊”、“令堂”、“令爱”のような尊敬語、“家父”、“家母”、“愚兄”のような謙遜語の場合は、「私の」「あ

なたの」のような限定語が省略されるべきである。しかし、中性的な“爸爸”、“妈妈”、“哥哥”、“姐姐”、“弟弟”、“妹妹”の場合は、限定語は絶対に欠かせてはならないのである。

つまり、中性的中国語の呼称用語を用いる時には、連体修飾語の限定を明確にしなければならない。そうでなければ、相手に誤解されたり、違和感を与えたりしてしまう。

2.2. 呼称上の混同

以下のような文は、日本人学生が作ったものである。

- ① 我奶奶和奶奶是同岁。

〔お婆さんとお婆さんは同い年です。〕

- ② 我姥姥由我妈妈和我叔叔抚养。

〔お婆さんは、母と叔父が養っています。〕

①は、“同岁”で短文を作ってもらったときに、ある学生が作った文である。これを聞いて驚いた。もちろん、文章を作った人のお爺さんが二回結婚した可能性も否定できないが、しかし、さらに尋ねたら、なんと“奶奶”（父方の祖母）と“姥姥”（母方の祖母）の比較であった。日本語中の「おばあさん」は、中国語に訳すと、“奶奶”と“姥姥”二つの意味を持つ。そのため、その使い分けをはっきりしなければならない。この文は、“奶奶”と“姥姥”が混同された文である。

②を聞いた時、なんとなく妙に感じたので、さらに聞くと、この“叔叔”は、なんとお母さんの兄弟であった。つまり、「母方の叔父」の“舅舅”である。この文は、「母方の叔父」の“舅舅”と「父方の叔父」の“叔叔”が混同された。というのは、中国語の“舅舅”と“叔叔”がともに日本語の「叔父」に当たるからである。

また、日本人学生の口から、“舅舅”という呼称はほとんど耳にしたことがない。おそらく、ほとんどは“叔叔”で代替しているのではないかと推測している。

つまり、以上のような誤用の背景には、やはり中日両国の呼称文化の違いが最大の要因として存在している。

3. 飲食文化における誤解

- ① 给我来一盘饺子和一碗米饭。

〔ギョーザ一皿と白ご飯一杯をください。〕

- ② 来一个凉拌百叶。

〔“百叶”の和えものをください。〕

この二つの文自体には全く問題がない。しかし、どのような場面に用いるか、カルチャーショックを受けることがある。この二つの文は、ある中国語の学習者が、中国へ個人旅行に行った時に用いた文章である。①は、ギョーザと白ご飯二品だけを注文し、一回の食事としたのである。結局、店員に陰でくすくすと笑われてしまった。当然、他人を笑うのは失礼なことであるが、しかしこの食べ方は中国人にとってとても不思議なことである。その原因は、中国ではギョーザと白ご飯は共に主食だからである。一方、日本では、ギョーザを副食とするため、ご飯と一緒に食べても全然可笑しくない。逆に、餃子を主食とする中国人にとっては、おかず（副食）なしに主食ばかりを一回の食事として店で取るのはあまりにも不思議な食べ方である。

②は決して食べたくて注文したものではない。中国の飲食文化をあまり知らない人は、メニューに載っている“凉拌百叶”中の“百叶”という漢字を見ると、まず葉っぱだと勘違いしてしまう。実際は、この“百叶”は葉っぱとは全く無関係で、牛や羊の胃袋のことである⁽⁵⁾。脂っこい料理に飽きていた当事者は、あっさりした和えものを食べようとしたところ、この“百叶”を見て、葉っぱを多く含む精進料理だと思って注文してしまった。結局、運ばれてきたのはなんと、日本人があまり食べない牛の胃袋ばかりの和え物であった。中国には、日本のような写真付きのメニューがまだ少なく、漢字のみののが普通である。料理用語の異称は、外国人にとって理解にくい。

つまり、以上のような異文化摩擦は、①の場合は、学習者が日本の飲食文化習慣を中国に持ち込んだため、②の場合は、学習者が中国の飲食文化に対して理解が不十分だったために起こったのである。

4. ほぼ死語化した言葉の誤用

① 以前我在中国餐馆搞副业。

〔以前、私は中華料理店でアルバイトをしていました。〕

② 我已经退居二线了。

〔私はすでに定年退職しました。〕

かつて中国では、①中の“搞副业”と②中の“退居二线”のような言葉はさかんに使われていた。しかし、現在ではほとんど使わなくなり、ほぼ死語に近いと言っても過言ではない。にもかかわらず、この言葉を使う日本人の中国語学習者もいた。①の「搞副业」は中国改革开放後の八十年代頃の用語であり、日本語の「アルバイト」に相当した。当時は「アルバイト」の中国語の意味はまだ固定されていなかったため、“搞副业”、“勤工俭学”という言葉に訳されていた。しかし、現在では、“打工”に統一された。つまり、①の“搞副业”を“打工”に直す必要がある。

②の“退居二线”は、一般的に中国政府高官や共産党の幹部が引退や定年退職したことを指す言葉である。この言葉を一般人に使うのはあまり適切ではない。特に国を超えた一般の日本人が使うと、更に違和感を感じさせる。やはり、“退休”に変えるほうが違和感なく受け入れられるのである。

以上のような誤用は、学習者が言語状況の変化に対する理解が足りないゆえに、生じたものである。ちなみに、よく知られているはずの多くの単語に新しい意味が当てられている。例えば、“小姐”は「お嬢さん」の上に「ホステス」の意味が、“同志”は「同志」の上に「同性愛」の意味がそれぞれ加えられている。このような言葉遣いに対しても慎重になるべきである。

つまり、中国語の習得において、学習者は、死語であれ、新語であれ、それなりの文化的背景に常に留意し、状況の変化に合わせなければならないと思われる。

5. 音節、および対称上の見過ごし

中国語は、四声のリズムや対称の美しさを重視する、音節の調和を凝らす言語である。これはよく外国人に言われる中国語が音楽的な美しさを持つポイントの一つであろう。

そして、現代中国語において、新しく造った単語は、二音節が圧倒的に多い。つまり、単音節より二音節に発展する傾向が非常に強い。先行研究によると、二音節が全体の七割くらいを占めている⁽⁶⁾。しかし、多くの日本人学生は、このような中国語の文化的背景を知らずに、よく以下のような不自然な文を作ってしまう。

5.1. 苗字に現れる音節問題

① 我是林。

〔私は林です。〕

② 我叫原。

〔私は原と言います。〕

③ 我的汉语老师是李。

〔私の中国語の先生は李さんです。〕

以上のような名前に関する表記は、違和感を与える。“是”、“叫”は、中国人にとって、フルネームを言う場合に用いる。“林”、“原”、“李”のような日本人の苗字であれ、中国人の苗字であれ、一文字の苗字である限り、一般的に使わない。以上のような不自然な文章が作られた原因は、やはり日本の言語文化のマイナス影響である。というのは、日本語においては、あまり音節や字数を重視しないからである。

しかしながら、二文字の苗字の場合は、“是”、“叫”を使っても不自然には思われない。

例えば、“我是田中”、“她叫鈴木”、“我是欧阳”のような文は、全く違和感を感じない。明らかに、二音節が役割を果たしていると思われる。つまり、音節の関係で①、②、③の三つのような一文字の苗字の場合は、すべて“姓”を使うのが一般的である。但し、二文字もしくは二文字以上の苗字の場合は、“是”、“叫”、“姓”ともに用いることができる。

5.2. 二音節単語に対する無視

次の五つの文はどれも音節上において不足があるため、不自然さを感じるようになった文である。

- ① 他是男。
〔彼は男です。〕
- ② 有的人不喜欢学。
〔ある人は勉強が嫌いです。〕
- ③ 你再仔细找。
〔もっと注意深く探してください。〕
- ④ 网走的辽阔海和富野良的美丽风光感动了我。
〔網走の海と富野良の美しい景色は私を感動させました。〕
- ⑤ 根据国不同，文化也不一样。
〔国によって文化も異なります。〕

音節および字数対称から見ると、以上の文はすべて自然さが欠けている。①の“男”は“男的”に、②の“学”は“学习”に、③の“找”は“找找”か“找一找”に、④の“海”は“大海”に、⑤の“国”は“国家”にするほうが中国語らしい表現となる。換言すれば、以上の文章は、二音節語を使うべきであったのに、単音節を用いてしまった。誤用された原因はやはり母語による負の転移である。日本語が音節に対して全くこだわらないので、日本語母語話者の学生は中国語の文章を作る時に、音節のことを当然無視するであろう。そこで、日本語のような単音節のまま置き換えると不自然さがでてくるのである。

そして、以下のような例からも中日両国の音節文化の違いをうかがうことができる。例えば、中国には、“易县”、“义县”、“通县”、“雄县”のような県名がある。しかし、“县”を省略して一文字になった“易”、“义”、“通”、“雄”とは言わない。但し、二文字である“昌平县”、“顺义县”、“房山县”、“延庆县”の場合は、“县”が省略されても全く問題なく、むしろ、省略するほうが一般的である。

一方、日本では、漢字一文字の地名は、それほど珍しいものではない。岐阜市の「爪」（つめ）や「清」（せい）、長野県松本市の「桐」（きり）、東京都武蔵村山市の「榎」（えの

き)、愛知県西加茂郡小原村の「李」(すもも)、神奈川県足柄上郡松田町の「寄」(やどりぎ)等のような地名がその例である。以上のように漢字一文字でも読みは二音三音以上というのが普通である。ところが、読みまで一文字だけである、三重県の県庁所在地である「津」(つ)、飛騨市神岡町の「土」(ど)、岐阜県養老郡養老町の「田」(た)のような地名も存在する⁽⁷⁾。しかしながら、このような日本の一文字だけの地名が中国人にとってあまりにも違和感を引き起こすのである。

つまり、以上のような誤用は、中日両国の言語文化における音節および対称上の違いが根本的な原因である。

6. 語義文化に現れる誤解

語義には文化的要素が色濃く反映されている。もちろん、同じ漢字の国だから、日本人学生にとってそれなりのメリットもあるし、その反面、デメリットも存在する。中国語なら漢字を並べただけで通用すると思込む初学者の日本人学生もいる。実際は、同じ漢字の国だからこそ、次のような誤用がよく生じるのである。

6.1. 同形異義語の誤用

漢字は全く同じであるが、しかし意味が異なる「同形異義語」の誤用は、日本人学生がよく間違えやすいのである。

① 我和家族去旅游了。

〔私は家族と旅行に行ってきました。〕

② 暑假我和男朋友一起去东京了。

〔夏休み、私は彼氏と一緒に東京に行ってきました。〕

③ 我教你他的电话号码。

〔私はあなたに彼の電話番号を教えます。〕

①の“家族”は、日本語の「家族」と全く違う概念である。中国語の“家族”は、一族、同族、同じ血縁関係の親族全体を指す。しかし、日本語の「家族」は、「家の構成員」である。そのため、①はやはり“我和家里人去旅游了”のほうが正しい。

②は、もし女子学生が作った文であれば問題はないが、しかし男子学生による発言であったため、妙に感じてしまった。実際、この文を作った男子学生は“男朋友”(彼氏)と“男的朋友”(男友達)の区別があることを知らなかった。誤用の原因は「男友達」をそのまま中国語に訳したことである。やはり、“暑假我和朋友一起去东京了。”という言い方が自然である。もし、どうしても「男友達」を用いたいのであれば、“暑假我和男的朋友一起去东京了。”

にしなければならない。

③の“教”は、確かに日本語の「教える」という意味であるが、しかし中国語の“教”は、知識や技術を伝授する場合にしか使うことができない。そのため、漢字のままで置き換えてはならない。ここでは、やはり“告诉”を用いるほうが自然な中国語の表現である。

以上のような誤用は、同形異義語をそのまま用いたために起こったものである。つまり、同形語を使うと、誤用をもたらすリスクが高い。この点に関して注意を払う必要がある。

6.2. 日本の言語習慣のそのまま移植

多くの初学者は中国の言語の文化的習慣を知らず、日本の言語習慣をそのまま中国語に置き換えて用いる。その結果、以下のような誤用例がもたらされる。

① 我的爱好是电影。

〔私の趣味は映画です。〕

② A. 我不会抽烟。

〔私はタバコを吸いません。〕

B. 我也。

〔私も。〕

③ 正忙的时候被客人来了。

〔ちょうど忙しいときに客に来られました。〕

まず、①の誤用原因を見てみよう。日本語の場合は、動詞を省略するのがほとんどであるが、しかし中国語においては、動詞を明示しなければならない。つまり、動詞フレーズにするのが一般的である。そのため、動詞“看”を加えて“我的爱好是看电影”〔私の趣味は映画を見ることです。〕のほうが自然である。

②の“我也”は、完全に日本語の表現習慣である。中国語ではほとんど通じないというか、話がまだ終わっていないのに、言葉を引っ込めたように思われる。つまり、“我也是”〔私もそうです〕のほうが一般的である。

③は、日本語の受身文がそのまま中国語にされたのである。実際は、目的語を持たない自動詞の受身文の場合は、中国語において受身文にはしないのである。やはり、“被”を取り除いて、“正忙的时候客人来了。”のほうが中国語らしい表現である。

以上のような三つの文の誤用は、日本の言語習慣がそのまま移植されたために起こったものである。言い換えれば、学生が完全に中国語を日本語の文章表現のパターンにあてはめたためである。

7. 使用場面や語感に対する理解不足

使用場面や「快」か「不快」の感覚を与える語感等は、固有文化そのものに根ざしていると思われる。もし、このような言葉の使用場面や語感を理解しないまま不用意に用いると、相手を不愉快にさせたり、誤解させたりする。以下のような誤用例は日本人学生がよく間違えやすい文章である。

- ① 早上好。
〔おはようございます〕
- ② 昨天我被老师表扬了。
〔昨日、私は先生に褒められました。〕
- ③ 你喝药了吗？
〔あなたは薬を飲みましたか？〕
- ④ 你买得起买不起？
〔あなたは買えますか？〕
- ⑤ 他是瞎子。
〔彼は目が不自由です〕

①の“早上好”という文自体には全く問題がない。しかし、何時に用いるかというポイントを押さえないといけない。すでに正午であったのに、“早上好”と挨拶されたことがよくある。かなり違和感を感じた。中国では、本当に朝の九時頃まででなければこの挨拶言葉はどうしても用いることができない。しかし、日本では、朝でも昼でも夜でも「おはようございます」で通す人も少なくない。この誤用は明らかに、母語話者の言語文化の負の転移である。

②は日本語に合わせると、確かに受け身文になるが、しかし“被”は、一般的にその動作が被動者にとって消極的な場合に使われる。ところが、“表扬”は褒め言葉なので、“被”と同時に用いると矛盾になる。“昨天我受到老师表扬了。”のほうが中国語らしい表現である。

③中の“喝药”は、液体の薬以外の場合に使うと、一般的に薬で自殺するという意味となる。日本語であれば、「薬を飲む」となるが、しかし中国語ではそのまま“喝药”に訳してはならない。やはり、“你吃药了吗？”のほうが違和感のない表現である。

④中の“买不起”と“买得起”は確かに可能表現であるが、しかし“买不起”は貧乏で買えない場合にしか用いない。そして、“买得起吗？”という疑問文も同じ意味になる。つまり二つとも自分に使うなら問題はないが、しかし他人に言うとき、「不快」を与える失礼な言い方となる。実際は、当事者の発話意図もそれではないと思われるため、正しい言い方は、“你能不能买？”もしくは“你能买不能买啊？”である。

⑤は、日本と同じく差別用語なので、視覚障害者を傷つける言い方である。やはり、“盲人”、

“失明人”などのような婉曲な言い方で表すほうがふさわしい。つまり、身体的特徴を持つ人とコミュニケーションする際には、その特徴に直接言及することを避けて婉曲な表現を用いるべきである。

以上の誤用例から見れば、①と②は言葉の使用場面の問題であり、③④と⑤は語感の問題である。つまり、使用場面と語感と言語の文化的背景と深く関わっている。そのため、中国語学習においては、言葉の使用場面の判断がとて重要である。もし無視すると、異文化と接触、交流場面における摩擦が生じやすくなる。不快感を与えないために、異文化の理解を深めて場面にふさわしい言葉遣いに留意すべきである。

8. 中国語における特殊な言葉文化現象——離合詞の誤用

離合詞とは、離れたり合わさったりすることができる特殊な言語表現である。日常生活において使われる率がとても高い。しかし、母語による負の転移があるため、たくさんの学習者が、離合詞をただの一般的動詞として使っている。意味は通じることは通じるが、しかし相手に奇妙な感じを与えるようになる。以下は日本人学生がよく間違える典型的な誤用例である。

① 昨天我见面他了。

〔昨日私は彼に会いました。〕

② 他喜欢帮忙别人。

〔彼は人を助けるのが好きです。〕

③ 我请客你。

〔私がおごります。〕

以上の“见面”、“帮忙”、“请客”の三つの離合詞に当たる日本語は、それぞれ「会う」、「手伝う」、「奢る」のような極一般的動詞である。それだからこそ、日本語のマイナス影響が誤用をもたらしやすくなる。多くの学習者が、上記の離合詞を一般的な動詞として思い込んで目的語をとって用いるようになる。実際は、“见面”、“帮忙”、“请客”は一般的動詞ではなく、「動詞＋目的語」式の特殊な動詞であるので、目的語をとってはならないということが重要なポイントである。

①から③の文は、それぞれ“昨天我跟他见面了。/ 昨天我见到他了。”、“他喜欢帮别人的忙。/ 他喜欢帮助别人。”、“我请你客。/ 我请客。/ 我请你”にするのが正しい。

実際、離合詞は、日本人学生だけではなく、ほとんどの外国人の中国語学習者にとっても間違えやすいものである。そして、中、上級レベルの学習者でさえも、上手に離合詞を操ることができる人はそれほど多くは見られない。

9. レトリック文化における誤用

レトリックの誤用においても、同じく日本の文化的背景のマイナス影響が明らかに存在する。本稿では主に比喩表現における誤用を視野に入れて検討する。

① 他这是往父母脸上涂泥。

〔彼はこんなことをして、両親の顔に泥を塗るようなものです。〕

② 我家小得像兔子的小屋一样。

〔我が家は小さくてウサギ小屋のようです。〕

①の「泥を塗る」の基本義は、確かに中国語の“涂泥”、“抹泥”の意味に当たる。実際は、この言い方は中国語においても、日本語と同じく「恥をかかせる」、「面目を失わせる」という比喩義を有する。①は、日本人学生が中国語の比喩表現を知らず、基本義そのまま直訳されたのである。“他这是往父母脸上抹黑”という比喩表現が中国語らしい表現になる。

②の「ウサギ小屋」は、日本語特有の比喩表現であろう⁽⁸⁾。中国語においては、狭い住居を形容する時は、「ウサギ小屋」で喩えることができない。

以上の二つの誤用文は、完全に日本語の表現方法をそのまま中国語に持ち込んだものである。つまり、レトリックの誤用の背景には、依然として文化的背景がマイナスの役割を果たしている。日本語のレトリックをそのまま使うと、中国語らしくない表現が出てくる可能性が高い。

10. おわりに

以上、日本人学生の中国語誤用とその原因について分析した。誤用の根本的原因として、学習者が中日両国の言語文化の背景の違いをはっきり認識できずに、両者を混同したことが挙げられる。まず考えられるのは、日本人学生の母語による負の転移である。初学者にとっては初めて出会った言語の文化的背景がどのようなパターンを持っているのか、完全には把握できていない。そこで、母国の言語文化や習慣を、そのまま目標言語である中国語に持ち込んでしまう。また、学習者の中国の言語の文化的背景に対する理解不足も原因の一つである。中国人とコミュニケーションを円滑に取ることができるようになるためには、学習者が異なる文化的背景の知識をさらに深く身につけなければならない。中国の言語文化を理解することは、中国語習得において重要な最初の一歩として認めなければならない。要するに、学習者にとって母国の言語文化の習慣からの脱却と中国語の言語文化の習慣への理解がともに必要不可欠である。

言葉と文化の間には切っても切り離せない関係が存在する。そのため、誤用を引き起こさないための方策としては、文化の導入が重要であり、教授者が日ごろの授業において中国文化および中国人の言語習慣を随時紹介する必要がある。両国の言語文化の違いを踏まえつ

つ、外国語を習得するのが良策であると思われる。

今後は、中国語教師として引き続き学習者の誤用例を収集・分類し、客観的な数値データに基づいて、誤用例に見られる偶発的要素と必然的要素、およびその実態をさらに分析する必要があると思われる。

注

- (1) 文化の視点から日本人学生の誤用を論じるのは、例えば、吴丽君等（2002）、陳月吾・唐麗燕（2002）、山崎直樹（2006）がある。他方、山崎直樹（2006）によると、異なる文化的背景のために、逆に、日本人にとって中国語教科書の中には違和感を感じる内容も存在する。
- (2) 例えば、相原茂編集『講談社日中辞典』（講談社、2006）、商務印書館・小学館共同編集『日中辞典』第2版（小学館、2006）。
- (3) 鈴木孝夫（1999）、114頁。
- (4) 同上 142頁、143頁参照。
- (5) ちなみに、“百叶”は「牛羊の胃袋」という意味のほか、「豆腐を薄く圧縮し乾燥させた食品」の意味もある。
- (6) 常敬宇（1995）9頁。
- (7) 『日本の地名を遊ぶ』（<http://homepage3.nifty.com/ados/0001chimei.html>）参照。
- (8) 木村傳兵衛、谷川由布子他著（2005）（『新語・流行語大全：ことばの戦後史』自由国民社、181頁）によると、「ウサギ小屋」は昭和54年に生まれた言葉である。

参考文献

- 吴丽君等（2002）《日本学生汉语习得偏误研究》中国社会科学出版社。
- 张英（1999）〈语义与文化—兼析日本汉语教材析〉《汉语学习》第6期
- 张英（2000）〈语用与文化—兼析日本汉语教材析〉《汉语学习》第3期。
- 杨德峰（1999）《汉语与交际文化》北京大学出版社。
- 张起旺、王顺洪主编（1999）《汉外语言对比与偏误分析论文集》北京大学出版社。
- 周思源主编主、林国立副主编（1997）《对外汉语教学与文化》北京语言文化大学出版。
- 赵永新主编（1997）《汉外语言文化对比与对外汉语教学》北京语言文化大学出版社。
- 王建勤主编（1997）《汉语作为第二语言的习得研究》北京语言文化大学出版社。
- 常敬宇（1995）《汉语词汇与文化》北京大学出版社。
- 陳月吾・唐麗燕（2002）「語言教学と文化：日本語と中国語の初級教育における文化導入について」『福井工業大学研究紀要』第32号。

山崎直樹（2006）「異文化間語用論と外国語教育」、『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』細谷昌志編、世界思想社。

鈴木孝夫（1999）『ことばと文化：私の言語学』鈴木孝夫著作集1、岩波書店。

森田良行（1995）『日本語の視点：ことばを創る日本人の発想』創拓社。

相原茂編著（1996）『中国語学習ハンドブック』改訂版、大修館書店。

ヘレン・スペンサー＝オーティー編著、田中典子他訳（2004）『異文化理解の語用論：理論と実践』研究社。

